

余白の風

求道詩歌で南無アツバ

二〇一一年一〇月発行
第一九〇号
毎月一回一〇日発行

者と一
行こ栄
白田
発余平

*日本人の心の参縁に於けるイハノの顔を決め、福音を生かす

会員作品とエッセイ(*主宰「メント」)

一宮市 西川珪子

天の門ひらかれていし秋の空

病葉の散る一瞬を祈りつつ

聖堂にロザリオを繰る秋深し

明月や夢故郷の山や川

秋草を摘むひとときの平和かな

*②一期一会。生老病死、人生の儚さへの祈り。③真に落ち着く、生きた時間。④最後に帰る思いは故郷の自然。⑤小さいものに見出す真の平安。震災や台風、この上半期は生きるとは何か、日本とは何かを考えさせられました。

秦野市 長谷川末子

若草色のスイッチョが／カーテン揺れる中に
いる／何年振りの訪れに友を迎える心地する
／机の端にガラス戸に見え隠れする細い足／
今朝目ざめると枕元ふつと気付いた気がつい
た。胡瓜を薄く二三枚網戸を開け虫を置く／閉
めて淋しく外を見る素早い動き又肩に／テレ
ビ体操する時も肩から首へ頭へと／「もういい
んだよ外は秋」／外に放つてさようなら／心の
沈む数日を慰められて喜んで

*考えてみれば、虫も植物も人類よりずっと昔から
生きのびている——大先輩なんですね。悠久の時間
から訪れた「友」一匹のスイッチョに感謝！

稻城市 石川れい子

敬老の日や早朝の露天風呂

虫時雨読経の如く休みなく

草の花十花十色の個性かな

葡萄園の主の想ひ南無アツバ

引退の神父のはなし身に入りて

主宰「求道俳句集」選

わだかまり解けて月指すトマの指

仰ぎ見る十字架優し敬老日

穴惑い両輪見事かわしけり

*九月一日(日)東京・立川教会にて行われた井
上神父共同司式のミサ(裏面写真)に参加された由。
お説教(音声)は平田のブログ「南無アツバを生き
る」にアップしています。(前号作お詫びと訂正「ひ
まつぶし」↓「ひつまぶし」)

名古屋市 片岡惇子

渋柿の青き信仰南無アツバ

秋の蝶余力を信じ天に発つ

鯛雲棄てきれぬものと一つ

白無花果燃えて弾けて透けてゆき

鯛雲解き放されてただ浮かぶ

秋暑し重ねし年を捨てきりし

*①上五中七が利いている。テレジアの幼子の道を
想う。②もうだめかと、ふと思う一瞬、アツバの励
ましがある。③捨てようとする自分もアツバに任す。
⑤「ただ」がポイント。無我の境地への憧れ。

大和市 佐藤悦子

実る穂のベクレル数値南無アツバ農家の

友の声近づけり

秋の庭に宇宙のカメラとらえたる日の出

の十字架聖なる光

病みて知る小さき花よ南無アツバ

老いゆきてテレジアの道ナムアツバ

*①被災地の友を思う。「わたしたちにもそのよう
な人々の心を写し取れる友の心をお与えくださ
い。」(風の家)の祈り。まさに今祈るべき祈り。③④
テレジアの究極の祈りを日本語にすれば「南無アツ
バ」

豊田市 佐藤淡丘

船宿の櫂のさやけしむすびの地

秋日浴び水門の鯉旦悠然

リズムもて漂ひはじむあきつかな

吟行抄

秋初めの一日、小さな結社の小さな吟行を奥の細
道むすびの地(大垣)で過しました。

水の都にふさわしくお城を取り巻く水門川は、伊
吹嶽の自噴流と重なり今も清い流れを醸し出して
います。吟行での作句は思うに任せませんでした
がこの日の《おとづれ》は無性に亡き畏友、カトリッ
ク俳人、岸貞男の面影が浮び、この地で詠ったであ
ろう作品が終始気になる不思議な一日でありまし
た。

美しきさみしき川藻うねりをり

炎天行く十三人のそのうしろ

水の上一人が立ちて水澄めり
岸貞男句集『花魂』より

*「作句は思うに任せず」と仰りつつ、いつもながら安定した詠みっぷり！ たしかに吟行や句会などで、主題と違った昔のことが妙に思い出される、という経験があります。アツバの計らいか。岸氏の洗練された三句も、ありがとうございます。

京都市 瀧野悦子

ちちろ鳴く山のお寺や南無アツバ

ひぐらしや日に二便の山のバス

聖書読むとことん秋の夜長かな

書に倦みて独りに倦みて長き夜

あつ危ないブレーキ握るわたくしにそしらぬ顔のお城の鳩よ

毎朝、自転車で二条城を半周しながら四条へと向います。この鳩はわたくし、ブレーキはアツバです。アツバに守られている日々。

*なんでもない日常にこそ真理が見える、そう感じさせるお作。人が命の危機に際して思い起こすのは人生の大事件でなく、毎日食べたお味噌汁の味や、あるとき交わした何気ない会話のことだといえます。南無アツバ

蓮田市 平田栄一

復活したイエスの第一証人はマグダラの

マリヤ元娼婦たり

俺が立つ所はどこにもないのだから俺を立たせる無があるばかり

寄贈誌よの

「日矢」五六〇号

鷗外に秘めたる恋や沙羅の花

天近き檜原村や星涼し

新堀邦司

はも料理京に伏見の銘酒あり

『幼きイエスの聖テレシアの教訓と思い出』覚書2

テレシアは「靈的幼児の道」によって、より「謙遜」となった。事実、「小さき者」として終生、修練院にとどまった。(18)

「隣人が時折、私どもをけなすことをたいへん喜ぶべきです。というのは、だれもそういう仕事をやる人がなければ私どもはいったいどんなになるのでしょうか。ですから、それは得なのです。」(20)

——「謙遜」の徳について、けなしてくれる人がいるから、謙遜になれる、ということか。

「私でしたら(略)、不正当にとがめられるほうを好みます。自分には何もとがめることがありませんから(引用者注：自分からは自分をとがめることがない、ということか)、そして私は神様に、喜んでそれをお捧げいたしましょう。次(のいつかの時)に(は)私にしても、そのとがめられたことをやりかねないと考えて自らへりくだります」(21)

「謙遜は真理であると私には思われます。(略)」彼女の教えの土台は、自分が弱さそのものであることを見ても悲しまず、むしろわれらの弱さを誇ることを教えるにありました。「自分が弱く小さいものであることを感じるの、いかにも快いことです。」と彼女は言っていた。(傍点原文、21)

九月十八日、立川教会 共同ミサでの井上洋治神父



——「わたしは弱いときにこそ強い」(コリント 一二・一〇)というパウロの逆説を思わせる箇所。

「今のところあなたに必要なことは英雄的徳を修行することではなく、謙遜を勝ち得ることです。それがために、あなたの勝利にはいつも失敗がまじっていないなければならないのです。あなたがその勝利を嬉しく思うことができないように。かえってそのことを思い出すと自分が偉大な靈魂ではないことに気づき、あなたをへりくだらせるでしょう。」(24)

——「〇〇%成功!と思えない方が、かえって大事なのだという。」

「不完全であったことが、私には喜びのように思われました。きょう、神様は、私に大きなお恵みを与えました。よい日でした。」と、それで私は、どうしたらそんな気になれるのかと尋ねた。「私の小さい方法、それはいつでも嬉しそうに、いつもほほえんでいることです。ころんだ時にも勝利を博したと同じように!」と彼女は答えた。(24と25)

——不完全やころんだ時に喜べる、これこそ弱さの中の強さ!

彼女は十字架上のイエズスの聖画の下に次の言葉を書いておいた。「主よ、私があなたをお愛していることはよくぞんじでいらつしやいます。(ヨハネ 二一・一五〜一七)けれど私をお憐れみくださいませ。私は罪びとにすぎませんから(ルカ一八・一三)」と。これは彼女の常日頃の心がけをあらわしたものである。(25)

——罪人のまま愛せる、というのは、わたしたちにとって意外に新鮮な発見!

定例・南無アツバの集い平田講座十月二十九日(土)

- *どなたでも参加できます。初心者歓迎。
- *投稿は採否主宰一任 *締切は毎月未必需
- *入会希望は余白メールにてご連絡ください。
- *年会費(二千円(送料共)) *ブログ：南無アツバを生きる
- *干振替口座 〇〇一七〇一三一二六〇九〇九 平田栄一